

ケアマネだから できること

21

ケアマネ、あの眼、この眼 ～娘の不登校～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

今回は、ケアマネ仕事とは離れ、全くのプライベートな出来事を書いておこうと思います。これは、親としてなのか、ケアマネという対人援助の仕事をしている職業人という立場からなのかは、自分でもよくわかりません。ヒューマンサービスという括りで考えた時に、学校の先生も、ケアマネジャーも、共通する姿勢があるのではないかと考えました。私の中の母親の部分か、或いはケアマネジャーの部分なのかはわかりませんが、娘の不登校を通して、大きな怒りや悲しみを感じながら歩んだ3か月を、今の記録として残しておこうと思ったのです。「書いてもいいよ。」と言ったのは、不登校だった娘です。書くことで、誰かの目に留まる時、ほんの少しでも、誰かの元気の種になることを願いながら、書いて

みようと思います。

～その時～

1月下旬の寒い朝。飼い犬にエサを与える当番の長女が起きてきた。エサを与えた長女は、その後2階の自室に上がって行った。てっきり登校準備をしていると思っていると、そろそろという時間になっても、自室から降りてくる気配がない。何度か階下から、大きな声で「遅刻するよ。」と叫んでみても、私の声に反応もないため、同じく登校準備をしていた次女に、「声をかけてきて。遅刻してしまう。」と頼んだ。間もなく、一端は2階に上がって行った次女が、階段を下りて、私のもとへやってきた。「お母さん・・・」と、その声は小さいながらも、何か緊張を含んだ言い方

だ。「泣いていたよ。学校で、嫌なことがあったのだって。」次女は、ためらいながら私に教えてくれた。青天の霹靂などではない。ただ、クールで気丈な長女が、ここにきて（3学期が間もなく終わりに近くなっているこの時期に）、ストップしてしまうなどとは予想外だった。「言わないで・・・」、気を遣うように次女が私を見つめる。「大丈夫だよ。」と言いつつ、私はそのまま長女の部屋に向かった。

「どうしたの？嫌なことがあったの？」

「私は、クラスの子に嫌われていて、嫌なことをされている・・・」そう言った後は、涙で言葉にはならなかった。まずは、学校へ連絡して、この言葉を伝え、状況を確認するために、その日は休ませること、状況が分かり次第、学校の先生へも経過を報告することとした。

この出来事が、青天の霹靂でなかったことには、いくつか思い当たることがあったからだ。

～入学後まもなく～

中学を卒業して、期待を胸に希望する高校へ進学した娘は、兄の影響を受けてか、野球部のマネジャーになった。意外な選択にも感じたが、ちょうど同じ春に高校を卒業した兄が、3年間高校野球に没頭する姿を見ていたことが、高校野球の面白さを発見したのだとも理解した。高校野球のマネジャーの仕事も生易しくはない。休日も早朝から、遅い時間まで、部員と同じように活動している。「大丈

夫？楽しい？」と声をかけると、わずか1か月と少しの時点で、「・・・」沈黙の表情が返ってきた。部活を辞めたいと言い出したのも夏休み前のことだった。夏休み入り、担任教員と、娘と私の3者での懇談があった。その時に、クラス内での、多少の人間関係のゴタゴタがあったことを担任から聞かされた。今は、解決している、というのが担任の説明でもあり、娘もそれ以上のことは言わなかった。けれども、入学後一度も娘の口から、学校生活について「楽しい」という言葉を聞いたことがなかったのは、私の中の気がかりでもあった。何度となく「学校は楽しい？大丈夫？」と声をかけたことがあったが、一度も楽しいという言葉は返ってくることはなく、「楽しくなくても学校は行くものだから。」と、表情を変えずに言う長女を、クールな個性ととらえていたのは、その痛みに気が付くことが遅れた母親である私の失敗だったと思う。

夏休み中も、部活に通っていた娘は、休みが明け、秋の大会が始まる直前に、夜中に選手の一人一人に持たせるお守りを作っていた。

（このような仕事が、野球部のマネジャーには代々あるようだ。）そして、その大会が始まると娘は部活を辞めた。後で、知ったことだが、退部の意向がなかなか受け入れられず、最後は、黙って部活に行かなくなって辞めたという結果になった。そして、入学間もない頃、この部活の中でも、明らかな、嫌がらせ行為が娘に向けられていたこともわかった。

～タイミング～

雪深い毎日の中で、新年を迎えた。間もなく、私に「顔面神経麻痺」という奇病が取りついた。幸い、自分の異常を早期に感じることができ、すぐに病院にかかったことも功を奏し、発症から2週間ほどで、私の顔の麻痺は随分と快報に向かっていた。そして、私の回復を見計らったように娘が学校に行けなくなったのだ。子どもというのは、親のことをよく見ているものだ。きっと、病状の最悪な時には、私に遠慮していたのだろう。辛い中、頑張っ学校に通っていたことを思うと、私が元気になることで、娘の我慢が限界を迎えることができたのかもしれない。

とは言っても、親としてこの事態を冷静に対処できるほど容量も持ち得ていない。長い人生の中で、学校に行かない日があっても、どうということはないことを承知の上、早期に対処しておかなければならないこともあるのだろうと想像し、焦りと、どこに向けて良いかわからない怒りも感じていた。

～事実や気持ち～

いったい何が起こったのか。これからどうすればいいのか。まず娘の話が聞きたかった。けれども、娘に、「可能な範囲で教えて欲しい。」と言っても、最初のうちは、思い出しては言葉にならないうちに泣き崩れてしまい、とてもその出来事を話題に扱う状況ではなか

った。

月曜日から登校できなくなった娘の学校に、土曜日に親が行き、担任を始め教員との面談を果たした。娘から、可能な範囲で、誰に、どんなことをされたか、を確認した上で、学校としては対処していく、とのことだった。その後、娘も相当悩んだ挙句、自分の気持ちや自分が受けた事実を話すことで、状況が好転することを期待して、幾人かの男子生徒の名前と状況を確認することができ、学校側へ伝えた。すると担任は該当生徒へ確認し、事実としては、あっさりと認めた生徒だったが、「そんなつもり(娘を傷つける)はなかった。」という説明だったようだ。その後、期末試験の時期が来て、それらの生徒への指導は保留されたまま、学校側は、娘に面談することができない状況では、何もできないと言わんばかりに、対応が宙に浮いてしまった。何が起こったか、事実を伝えることで、状況が変化し、学校へ戻れるかもしれない、少しだけ娘が持った可能性も、テストや、入試に対応が優先されていくうちに、ゼロになってしまった。早期対応の重要性を感じる時期であった。学校の言い分としては、「本人に会えないから。」というものであったが、叶わない状況の中で、何ができるか、できることを探し問題のこう着を防ぐことが大切だと思うのが、事実がどうにかに拘る学校側としては、双方(被害・加害)の話が聞かなくては前に進めない、と言った印象だった。生徒が事実を認めたの

にも関わらず、「そんなことをしたら人は傷つくのだから。」という当たり前の説明言語が、該当生徒に対する指導だったと言われても、娘が安心して学校に復帰する光にはならなかった。

～節目、決断～

学校に戻れる可能性が限りなくゼロになった時点で、次の目標は、4月という節目に新しくスタートできる環境を整えることだった。転校先の学校を調べ、公立の単位制高校に転校するための手続きを進め、転入試験を受け、4月の転入学が決まった。

転入学が決まった時点で、元の学校と娘の面談が叶う形となったのだが、あれだけ本人の話が聞きたいと言っていた学校側は、娘の気持ちを聞く前に、自分たちが確認した加害生徒の言い分を説明し始めた。それには、娘に非があるような説明であった。娘はひどく落胆をした。

問題が発覚した初動期の対応が雑で、既に次の再スタートが決まった時点での面談に、何の意味があったのだろうか、と思う。ましてや、加害側の主張だけが擁護されているような印象を強めてしまったことも、学校や教員に対する不信を募らせてしまった。

～多様な社会、多様な生徒～

設定目標の通り、娘は4月を新たなスタートとすることができた。定時制高校は、それ

まで通っていた全日制の学校とは、およそシステムが異なっていた。幸い、全日制高校にほぼ1年近く通い、習得した単位も認められ、新たな学校では、必修科目よりも、選択科目を選ぶことができる状況だった。それは、娘の興味関心の高い韓国語の授業や、異文化交流などという科目もあるようだ。さながら、大学のような雰囲気だ。それら、全ては先生らの丁寧な相談対応の元、自己決定することをサポートされているのだ。

この学校の生徒のほぼ半数近くが、小中学校の時に不登校を経験し、更に、12人に一人は発達障害という診断を受けている生徒もいるとのこと。3年または4年かかって卒業に必要な単位を修得すれば良い仕組みになっている。卒業後の進路も、大学や短大、専門学校、就職、自宅療養など多様な進路になっている。ここで、非常に驚いたのは、大学進学と言っても、難関国立大学に合格している生徒もいるということ。学校の授業だけでは不足するところを、先生方が授業とは別に、休み時間等にサポートしつつ、学ぶ意欲のある生徒を支えているということだ。一方で、小中学校の不登校で学べなかった学習についても、丁寧に再度学習できるような体制も整っているのだ。多種多様なレベルに対応することは、手間も暇もかかることで、それが望ましいことであっても、なかなか実現されにくい社会になっている今、とても誠実な学校の対応を感じたものだった。

この学校では、学校に到着することで、まずよし、とされていたり、休んだり遅刻の連絡ができることでよしとされたりもする。それは、出来て当たり前、という価値ではなく、学校や先生は、生徒にできないことがあれば、できるようになって、社会に参加し、つながっていけるように、育む環境であるという前提があるようにも感じた。

授業の始まりや、終を知らせる合図もない。当然、時間の管理は各自に任されている。それもまた、何もかもが管理される多くの学校システムに対して珍しくも感じてしまうが、本当の意味での自律というのは、そういうものなのだろう。

様々な道があることを娘は知った。成績が良くても、将来への夢が描きにくかったこれまでとは違い、娘が夢を描けるようになってきた。学校や、授業が楽しいと言っている。先生が声をかけ様子を心配してくれる。思い切って自分の悩みを打ち明ける。そのような体験の中から、「大人は・・・先生なんて何もしてくれない。」と、かつて抱いた絶望も色を薄めつついつている。今の娘が元気に学校へ通っていることが何よりも嬉しい。

～様々な状況の中で～

生きてると、自分のことや、自分の周りで様々なことが起こる。いつでも冷静な対処などできるわけではない。私は、普段は、ケアマネジャーとして、多くの高齢者やその家

族の相談援助の仕事をしているが、いざ、我が身に起こった出来事に、冷静な思考などは持ち合わせていないことを実感した。

まず、私がしたことは、職場に自分の抱える状況を伝えたことだった。こんなことが起きました。何かと心配事を抱えています。そのようなことを、同じフロアーの仲間に伝えることで、私が時に怒ったり、落胆している様子を受け止めてもらうことができた。親として、心配事を抱えた状態であろうとも、ケアマネジャーとしては、誰かの相談に応じる必要がある。自分が安定していなければ、誰かの相談に応じるエネルギーなど保つことは難しい。その面では、職場の仲間にサポートされていることで、ケアマネジャーとしての相談業務を全うすることができたと思う。仲間には本当に感謝であった。

そして、このような仕事のつながりから、この道のプロ（カウンセラー）に個人的に相談をし、助言をもらうことができた。それは、とても大きな心の支えとなった。

～今をつくること～

娘が学校に行けなくなった時、家の中にじっとしていた訳ではなかった。その時にしていたアルバイトには通っていたし、好きな東方神起のコンサートにも行くことができた。友達と約束をして、ショッピングにもでかけていた。その時々支えてくれた友達がいた。学校に行けなくても、どこかに行けたらいい

と思う。何かにつながっていたらいいと思う。
人は、いつ、どこで、どんなことに影響されるかわからない。時間という薬もあるようにも思う。ただそれは何もしないということではなく、何かを探し続けることなのかもしれない。

今、娘は元気に学校に通っている。どこからでも、道を拓いていけることを体験したのではないかと思う。これからも、きっと色々あるだろう。今を楽しむことができれば、少し先の未来も信じていくことができるはずだ。そして、自分の痛みを知ったら、誰かのそれにも想像が巡るだろう。

当たり障りのない、面倒をさける風潮。目の前で誰かが苦しんでいても、「知らなかった。」と言って通り過ぎていける無神経さ。弱さなのか、凶太さなのかわからない人間たちがこの世の中にうようよしている。

自分は、どのように生きているのだろうか。
どのように、生きていくのだろうか。